

3 まとめ

会津盆地において、内部構造の明らかな館跡の調査例は多くはない。有力な陣が峯館跡や北田城跡、新宮城跡と比べると、決して大きくはない。むしろ小型の部類である。しかし、旧塩川町麻生館よりは、堀の規模は格段に大きい。またこの東南部にも館跡が存在しているという。これとともに、提子と中国産染付けを納めた地鎮施設は、館居住者の実力を示している。この館の居住者は、室町時代後期において、喜多方南部方面における有力な領主の一族であったと考えられよう。

室町時代後期は、黒川城に本拠を置く芦名氏が戦国大名として急速に勢力を拡大する時代である。この社会情勢のなかで、会津平に割拠する大小領主も緊張した生活を営んでいたことであろう。18号溝跡等で確認された火災層もあるいは、このような状況の一端を物語る遺構の可能性があろう。また、下高額館跡の周辺には、室町時代前半期には掘立柱建物跡が点在していたが、堀が整備される頃になると消え去るようである。館背後の平坦面に、意図的に広い空間を設けたのであろうか。一方南側は湿地で、館の防御を意図した立地である。さらに西側には、縄文時代からの自然流路があり、これも防御施設としての役割を果たしていたであろう。

会津盆地の内には、下高額館跡と同様な遺跡が、数多く分布していることが知られている。しかし、発掘調査によって内容の判明した例は少ない。高堂太遺跡の調査成果は、そういう意味で今後会津盆地の中世史を考える基準資料のひとつといえる。

(福島)

第2節 会津盆地における平安時代後半期の土器様相

今回調査を実施した60号溝跡からは、多くの土器が出土した。層位的には1層から3層まで幅が認められるものの、多くは調査区北西部からの出土である。特に、3層は炭化物を多く含み、川に向けて一括廃棄したと考えられた。これらの土器は以下の形態的な特徴が認められる。

①器種は、直径10cm、底径5cm、器高3cm程度の皿が主体を占め、杯に比して出土量が多い。

また、皿・杯は内面黒色処理されていないものが大多数を占める。

②大半の皿・杯の胎土は、混入物が少なく、焼成温度もそれほど高くない軟質な印象を受ける。

また、土器の厚みが5mm以上と厚いものが多い。

③土師器の甕類は非常に少なく、出土したものは杯同様、厚みが1cm以上と厚ぼったいもので占める。杯類に比して、胎土は砂粒の混入が多い。

④土器の色調は、赤褐色を呈するものが少なく、灰黄褐色・にぶい黄橙色を呈するものが大半を占める。

これらの特徴を有する土器は、いわゆる内面黒色の杯に代表されるロクロ土師器の範疇ではなく、それに後続する須恵系土器・赤焼土器・土師質土器と呼称される土器群に相当する。この土器群は、会津地方はおろか、福島県内でも良好な出土例が少なく、これまで論じられることが少なかった

(木本1990・山中2004など)。筆者もかつて会津盆地内における10世紀後半～12世紀にかけての土器を整理したことがあるが(会津坂下町教育委員会2005),概期の土器様相は類例が少なく、不明な点が多くあった。この60号溝跡から出土した土器群は、会津地方の古代末期の土器様相を明らかにする上で、重要な位置を占めると思われる。ここでは、これら土器群の年代的な位置づけを行いたい。

なお、分析にあたっては、会津盆地内における類例を抽出し、その形態的な変遷を推測していきたい。また、会津地方の出土例は標識となるべく紀年銘の資料や灰釉陶器や白磁・青磁が共伴した例がほとんど認められないので、近隣地域の良好な定点資料を用いながら論じたい。

1 高堂太遺跡60号溝跡出土土器の組成と製作技法

先に、大まかな形態的な特徴を述べたが、ここでは詳細な観察を試みたい。

本遺構から出土した土器の破片数は5,076点で、大半は杯ないし皿の破片であった。ただし、河川跡という遺構の性格もあって、内面黒色のロクロ土師器も一定量出土している。このため後世の混入も考慮しなければならないが、明確なロクロ土師器と思われる土器は破片化が著しいことから、図化していない。また、本節で対象とする須恵系土器は器形の認識が可能な個体のみ掲載した。このことから、ある程度のまとまりがある土器群と考える。このことを前提にして論を進める。

器種とその組成 まず、器種の分類について説明しておく。内面に黒色処理やミガキなどを施した土器をここでは土師器とする。それに対して須恵系土器は、基本的にロクロ成形のみで製作された土器を指す。赤焼土器や土師質土器・かわらけなどという呼称もあるが、ここでは便宜的に須恵系土器としておく。黒色土器は、内外面黒色処理されたものを指し、高台杯や杯などが存在する。

本遺構出土の器種は、土師器が杯・高台杯・甕、須恵系土器が皿・杯・高台杯、須恵器がそれぞれ認められた。ただし、須恵器杯は別遺構からの破片と接合したことから、流れ込みによる可能性が高い。土器の割合は須恵系土器が8割近くを占め、土師器が2割となる。総じて、須恵系土器主体の組成を示す。須恵系土器の器種は、口径9～10cmの法量をもつ小型杯が須恵系土器総量の半数近くを占め、それよりも口径が大きな杯は数が少ない。また、小型杯に比して、杯や皿は口径・底径のバラツキが目立つ。小型杯・皿・杯の法量は以下の通りである。

小型杯 - 口径10cm, 底径5cm, 器高3cm前後

皿 - 口径10.9～11.9cm, 底径4～6.8cm, 器高2.0～2.5cm

杯 - 口径11～13cm, 底径4.2～4.9cm, 器高2.7～3.0cm

製作技法 次に、これら土器群の製作技法を述べる。まず、須恵系土器の皿・杯類はすべてロクロ成形で、器面の調整にコテ状工具によるナデが実施されている。このため、器表面のロクロメは鋭角なものが多い。同時に、コテ状工具の端部で調整を実施したがために、器表面が沈線状となるものも存在する。また、内面見込み部分に渦巻き状の調整が観察される資料も存在する(図14-22～24)。

この調整は、いわき市大久保F遺跡30号土師器窯跡などでも見られ(福島県教育委員会1996),遅

くとも9世紀末には出現し、須恵系土器はほぼこの技法で占められる。コテ状工具による調整は、もともと灰釉陶器の内面調整で用いられ（前川1984）、施釉陶器の広域流通にともなって土師器類の調整に採用される（小川1987）。本稿で対象とする土器群の多くはこのコテ状工具による調整で、体部下端が丸みを帯びた丸底風の土器（図14-6・8・9、図15-15）もこのコテ状工具で面取りされた結果と推測される。

次に、土師器について見てみる。内面黒色処理された土器の外面は須恵系土器同様、コテ状工具で調整されている。内面のヘラミガキは非常に粗いものが大半である。それほど摩滅していないにも関わらず、単位が不明瞭なものが多い。高台杯も同様の調整となるが、特に図17-4はコテ状工具のみで調整された土器となろう。

甕類は、粘土紐積み上げ後、口クロ成形を実施し、胴部外面に縦方向のケズリが施されたものが多い。また、胴部下半外面にタタキ成形が実施されたものと、ケズリのみの個体の2者が認められる。タタキの幅は5mmと幅の広いものから、1mmほどの狭いものまで認められる。9世紀代の甕と比べて造りが雑で、タタキの幅も異なる。同時に器壁が厚く、色調が褐色を呈する土器が多い。なお、図20-1は胴部下端に網代状の痕跡が明確に残る資料で、成形時に網状のものを敷いた痕跡であろうか。これも9世紀代のそれとは異なる。

2 土器群の年代的位置づけ

土器の分類 今回の分類に際しては、細分化することをできるだけせず、皿や杯は底部の形態のみで分類した。また、器種は皿形・小型杯・杯形（椀形も含む）とし、それぞれ高台の有無などで区別している。おおむね、杯を扁平化したものが皿で、小型化したものが小型杯ととらえた。なお、小型杯と小皿の峻別はその線引きが難しいことから、法量の大小を問わず扁平な土器は皿と認識している。皿形・小型杯・杯形土器の分類基準は以下の通りである。

A類－底部が突出せず、体部から緩やかに口縁部に移行する土器。

B類－底部が突出するもの。底部が直立するものと、底部が台状を呈する土器があるが、ここでは同一に扱う。

出土土器の年代的位置づけ 会津地方で類似する土器は、大江古屋敷遺跡1号土坑（会津坂下町教育委員会1990a），中西遺跡3号井戸跡（会津坂下町教育委員会1990b），宮ノ北遺跡1号溝跡（会津坂下町教育委員会1994）など、摂関家領である蜷河莊の故地で多く出土している。次に、これらの遺跡群との比較を試みる。

各遺跡における皿・杯類（高台杯も含む）法量のグラフを表1に示した。これをみると、本遺跡の法量は口径が大きい皿・杯類は集中しないものの、小型杯はおおむね大江古屋敷1号土坑よりも口径が小さく、宮ノ北遺跡1号溝跡よりは口径が大きい。器高は宮ノ北遺跡では1cm台のものがあるのに対して、大江古屋敷遺跡や本遺跡は1cm台のものはほとんど見られず、2～3cm台にピークが見られる。以上から、高堂太遺跡60号溝跡出土土器群は、大江古屋敷遺跡1号土坑と宮ノ北遺跡

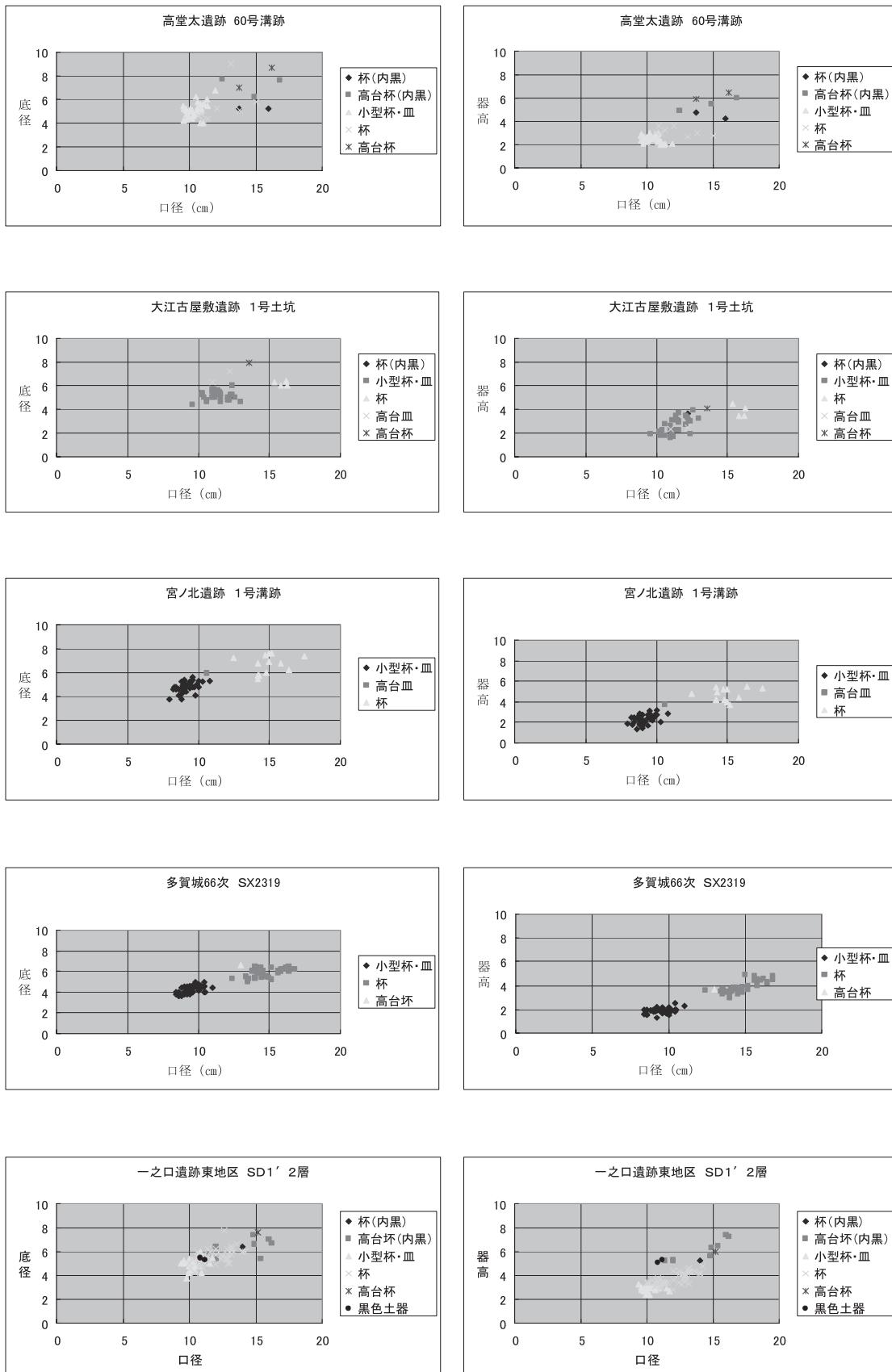


表1 各遺跡・遺構における法量の比較

1号溝跡の中間に位置することが明らかである。

次に、器種について見てみる。大江古屋敷遺跡1号土坑は須恵系土器主体で、組成としては小型杯が全体の4割を占め、次に皿が続く。皿・杯はともに底部が直立しないA類が主体で、底部が直立するB群も擬高台の高さが1・2mm程度と低い。高堂太遺跡は大江古屋敷遺跡1号土坑と似た組成を示すが、皿が少ない。皿・杯B類における擬高台の高さは同様である。

これに対して、宮ノ北遺跡1号溝跡は皿が見られず、すべて小型杯となる。本稿では小型杯としたが、小型化・扁平化にともなって小型杯が皿に変化するといったほうが適当であろう。また、皿・杯類はB類が増加する。このB類は底部が直立するものに加えて、底部が台状を呈する土器もみられる。組成的には、大江古屋敷1号土坑と類似し、宮ノ北遺跡とは形式的なヒアタスが認められる。

以上、本遺跡の土器群は法量や組成などの点から、大江古屋敷遺跡1号土坑と宮ノ北遺跡1号溝跡出土土器の中間に位置づけられる。大江古屋敷遺跡は越州窯系青磁碗が共伴し、その特徴から10世紀中頃～後半、宮ノ北1号溝跡は11世紀中頃と考えられることから、高堂太遺跡例は両者の中間に位置すると判断される。具体的には、宮ノ北1号溝跡との型式的な隔たりが認められることから、10世紀末～11世紀初頭の年代に比定されよう。

周辺地域の様相 ここでは、先に明らかにした土器群を、他地域と比較してみたい。まず、陸奥国府たる多賀城（多賀国府）周辺の様相をみてみる。多賀城におけるF群土器（白鳥1980）以降の土器群については、近年古川一明が細分化している（古川2007）。これによると、総じて杯ないし皿が大小に法量分化がなされ、時期が下るにしたがって法量が小型・扁平化の傾向になる。高堂太遺跡に並行するF-4b群の多賀城66次調査S X2319土器廃棄遺構（虎渓山1号窯式の灰釉陶器碗・壺が共伴）との比較では、法量的に小型杯が口径10cmと共通するが、器高がやや低い（宮城県多賀城跡調査研究所2007）。会津盆地の様相に比して、扁平化が各時代とも著しい印象を受ける。また、黒色土器や土師器が非常に少ない。多賀城外の鹿島遺跡1・4号土坑（宮城県教育委員会1984）、植田前遺跡2号溝跡出土遺物（宮城県教育委員会1981）などに比して、甕などの煮炊具の割合が極端に少ないので、政府域で甕などを必要としなかったためとも考えられる。

次に、越後との比較を試みる。上越市一之口遺跡東地区の川跡SD1'2層からは11世紀前半代の丸石2号窯式の灰釉陶器碗とともに、概期の土器が多く共伴している（新潟県教育委員会1994）。この2層より下層に位置する5層は法量がやや大型化するものの、器形的には変わらない。このことから10世紀末～11世紀初頭の年代と考えられている（水澤2005）。この5層は高堂太遺跡と法量や器種は共通性が高く、本遺跡で出土した底部が丸底風の小型杯Aも見られる。ただし、扁平な皿Aが欠落する。土師器や黒色土器も一定量出土し、土師器甕類なども見られる点が注意される。

この二地域との比較では、多賀城より越後に共通項が多く認められた。ことさら強調するまでもなく、越後との結びつきが地勢的に強かったと推測される。

なお、会津盆地以外の福島県内における概期の土器は散見されるものの、報告者によってその年代が大きく異なる。口径10cm前後の小型杯や皿が出土した遺跡としては、福島市岩崎町遺跡35号住

居跡・130号土坑（福島市教育委員会1992）・南諏訪原遺跡23号住居跡（福島市教育委員会1991），郡山市柿内戸遺跡2・38号住居跡（福島県教育委員会1982）・馬場中路遺跡5号家屋跡（郡山市教育委員会1983），桜木遺跡窯状遺構（郡山市教育委員会1983），いわき市上ノ内遺跡32号住居跡（いわき市教育委員会1994），楢葉町鍛冶屋遺跡31号住居跡（福島県教育委員会2000），小山B遺跡22・25号住居跡（福島県教育委員会2002）などが挙げられる。この地域ごとの細分化や編年は今後の課題としておきたいが，一見するところで分類した皿が皆無に近く，会津盆地とはやはり様相が異なるようである。会津盆地内の様相については次に触れるが，県内各遺跡との併行関係は今後の課題としておきたい。

3 会津盆地における古代末期の土器編年

10世紀前半—鏡ノ町遺跡A 3号不明遺構 会津盆地における須恵系土器導入時期の土器は鏡ノ町遺跡A 20号土坑が該当する。内面黒色の土師器・高台杯が主体であるが，須恵系土器の皿や高台杯が共伴している（塩川町教育委員会1997）。

これに後続する3号不明遺構（廃棄土坑）は須恵系土器が主体を占め，口径13cm，器高4cm程度の杯と皿・高台杯などからなる。須恵系土器の杯や皿は外面体部下端に再調整が施されているものがみられ，須恵系土器生産の初期段階には土師器同様の調整が行われていたことが伺える（塩川町教育委員会1997）。多賀城や福島県内の様相などから，10世紀前半代と考えられる。

10世紀中～後半—大江古屋敷遺跡1号土坑 大江古屋敷遺跡1号土坑出土資料は，前代よりも須恵系土器の比率が多くなり，内面黒色の土師器は数%に満たない比率となる。全体的に小型化が進行し，杯は口径12cm，器高3cm程度のものと口径16cm程度のものの大小二者に法量分化が進む。同時に，外面体部下端の再調整がみられない土器となる。前代同様，皿状の器形も存在するが，小型化にともなって，杯と皿の区別が明確ではない。また，施釉陶器模倣の高台皿・杯が出現する。本遺構からは越州窯系青磁碗I-2類（太宰府市教育委員会2000）が出土しており，10世紀中～後半と考えられる（会津坂下町教育委員会1990a）。

10世紀末～11世紀初頭—高堂太遺跡60号溝跡 様相としては，大江古屋敷遺跡1号土坑とほぼ同様であるが，先に触れたとおり，小型化が進行する。また，皿が減少する。内面黒色の土師器や黒色土器，甕などの煮炊具も存在する。現状では本資料が最終段階の土師器甕となり，以後消滅すると思われる。小型杯A類のなかには底部が丸底風に仕上げたものが認められるが，これは平安京など西日本の土師器から影響を受けた模倣，高台杯は東山72号窯式の碗を模倣した土器の可能性が高いと考えている。

もっとも異なるのは胎土である。大江古屋敷遺跡出土土器が砂粒・小石を多く含む胎土で，比較的高温で酸化炎焼成されているに対して，高堂太遺跡の例はやや砂質を帯び，軟質となる。色調も前者は赤褐色が多いのに対して，後者は褐色系のものが多い。この胎土の転換こそ，重要な視点であろうと考えている。

各遺跡における組成

地 方	遺跡 遺構	土師器 (内面黒色)			須恵系土器					黒色 土器	須恵器			備 考
		杯	高台杯	甕類	皿・小型杯	高台皿	柱状高台皿	杯	高台杯		杯	甕類	甕類	
陸奥国 (会津地方)	高堂太遺跡 60号溝跡	2	5	8	31	6		8	10		2	1		
	大江古屋敷遺跡 1号土坑	3			12	2		25	1		2		1	須恵器(大戸KA7) 越州青磁
	中西遺跡 3号井戸跡				6									
	宮ノ北遺跡 1号溝跡				35	3		18	1					
	陣が峯城跡				27		7	7						広東系白磁
越後	一之口遺跡東地区 SD1' 2層	1	13	3	51			24	3		2	1	1	灰釉陶器 (東濃・丸石2号)
陸奥国 (宮城県)	多賀城68次 SX2449	2	3	2	28	8		16	17		2			灰釉陶器・広口壺 虎渓山1号窯式
	多賀城66次 SX2319	5	1	1	60	1		40	18		2	1	1	灰釉陶器
	多賀城32次 SE1066 III～V層				11	1		4	1	1	1			邢・定窯系白磁

会津地方における10～12世紀の土器編年

時 期	遺跡・遺構 (会津地方)	土師器 杯・高台杯	黒色 土器	須恵系土器					共伴 陶磁器	特 徴	宮城県	越後
				皿	小型杯	杯	高台杯	高台皿				
10世紀 前半	鏡ノ町遺跡A 3号性格不明遺構	●	△	○		●				土師器主体 須恵系皿・杯の出現		
10世紀 中～後半	大江古屋敷遺跡 1号土坑	△	△	○	●	○	△	△	越州系 青磁	須恵系土器主体・高台皿 法量の小型化	F-4a群土器 多賀城68次 SX2449	
10世紀末 11世紀初	高堂太遺跡 60号溝跡	△	△	△	●	○	△	△		胎土の変化 (赤褐色→褐色)	F-4b群土器 多賀城66次 SX2319	一之口遺跡東地区 SD1' 5層
11世紀 前半	中西遺跡 3号井戸跡			●	△?	△?				底部直立皿の増加 口縁部面取りの小型杯	(植田前遺跡 第2溝状遺構)	一之口遺跡東地区 SD1' 2層
11世紀 中～後半	宮ノ北遺跡 1号溝跡			● (小皿化)	○	△	△	△		皿・小型杯の小型化 底部台状皿・杯の出現 胎土の変化 (水簸)	G群土器 多賀城32次 1066号井戸	
12世紀 前半	陣が峯城跡		?	●	○				広東系 白磁	高台杯・皿の消滅 柱状高台化		

● (主体・多量) > ○ > △ (客体・少量)

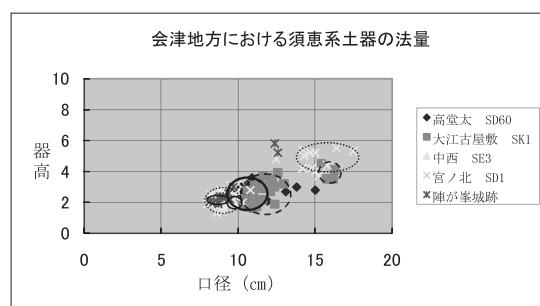
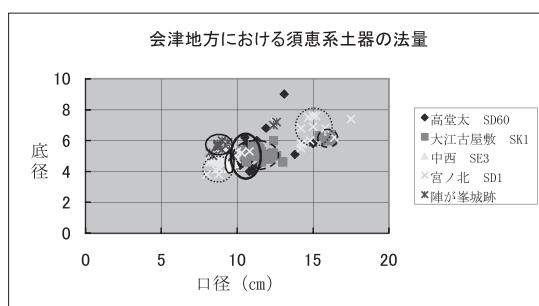


表2 会津地方における古代末期土器の編年表

時期 器種	須恵系土器				土師器	
	皿	小型杯・杯	高台皿・杯	黑色土器	甕	
10世紀前半						
	鏡ノ町遺跡A SX 3 (喜多方市塩川町)				黑色土器	
10世紀中～後半						
	大江古屋敷遺跡 SK 1 (会津坂下町)				黑色土器	
10世紀末～11世紀初頭						
	高堂太遺跡 SD 60 (喜多方市)					
11世紀前半						
	中西遺跡 SE 3 (会津坂下町)					
11世紀中～後半						
	宮ノ北遺跡 SD 1 (会津坂下町)					
12世紀前半						
	柱状高台					
12世紀後半						
	てづくね成形 (京都系)					
					漆器	
	荒屋敷遺跡 SD 9・12 (喜多方市塩川町)					
					0 (皿・杯類) 10cm (1/6)	
					0 (甕) 20cm (1/10)	

図82 会津盆地における10～12世紀の土器編年

11世紀代—中西遺跡3号井戸跡、宮ノ北遺跡1号溝跡 本期の土器は非常に数が少ない。あっても遺構外などで散見される程度で、明確な遺構として認識できないものが多い。中西遺跡3号井戸跡や宮ノ北遺跡1号溝跡が該当する。

中西遺跡3号井戸跡の資料は、小型杯が6点のみの出土である（会津坂下町教育委員会1990b）。組成的には不明となるが、口径が10cm、器高2cmで、口縁部が面取りされている資料が大半を占める。この土器は高堂太遺跡などでも認められ、法量の比較から中西遺跡例が若干新しい時期と考えられる。ゆえに、11世紀前半と考えておきたい。

宮ノ北遺跡は遺跡の立地する政所という地名から、蜷河荘の立荘時における中心部と考えられる。1号溝跡の資料は、口径が9cm台の小型杯と口径15cm内外の杯などから構成され、高台杯や皿など有台器種も認められる。また、黒色土器や内面黒色の土師器、甕類が含まれない（会津坂下町教育委員会1994）。

小型杯・杯は底部が厚く、前代に多かった直立する底部の他に、底部が台状を呈する土器が一定量見られる。また、小型化にともなって小型杯と皿との区別が不明となり、本期以降、中世的なかわらけに変化すると考えられる。胎土は水簸されたごとく粉っぽいものが多い。時期は、11世紀中～後半と考えている。本期の土器は木流遺跡（会津若松市教育委員会2000）や牛沢館跡（会津坂下町教育委員会1993）などでも出土している。

12世紀前半—陣が峯城跡 陣が峯城跡は宮ノ北遺跡同様、蜷河荘の関連遺跡で、出土遺物がほぼ12世紀に限定される。具体的には白磁主体で龍泉窯系青磁が1点のみであることなどから、12世紀前半～中葉と考えている（会津坂下町教育委員会2005）。皿・杯形土器のみの組成で、皿の口径そのものは前代に比して変化は認められないものの、底部が台状で、台部の高さが2cm以上のいわゆる柱状高台が出土している。これに反比例するように、有台器種が消滅する。共伴遺物は広東系の白磁の他、須恵器系中世陶器（在地系・株洲I 1～2期）や瓷器系中世陶器（渥美・常滑1b・2型式）などが出土している（吉岡1994・中野1995）。概期の土器は薬王寺遺跡（会津坂下町教育委員会2004）などでも出土している。

会津盆地ではこの時期に貿易陶磁器や国産陶器が本格的に導入される。陣が峯城跡と同様な白磁は越後の様相を見る限り、11世紀後半には導入されているようなので、本資料が遅くとも11世紀末までさかのぼる可能性はあるが、現状では12世紀前半の資料群としておきたい。

12世紀後半—荒屋敷遺跡 陣が峯城跡に後続する土器群は、荒屋敷遺跡4・9・12号溝跡の出土資料が相当すると考えている。白磁を主体としながらも、同安・龍泉窯青磁碗が多く認められる。このことから、陣が峯城跡よりは後続する（福島県教育委員会2003・2004）。皿・杯形と組成自体は前代と同様であるが、口縁部が直立する形態の皿が出現する。また、本期に手づくね整形の皿が出土していることから、12世紀末に京都系の土師器が受容されたと考えられる。

4 小 結

本節では、本遺構から出土した土器群について分析を行い、あわせて会津盆地における古代末期の土器様相について述べた。出土した土器群は、おおむね10世紀末～11世紀初頭にかけての資料と考えた。遺跡数の多い9世紀代に比して、遺跡数が少ない10・11世紀の様相は未だ不明瞭な点が多い。特に10世紀後半から12世紀にかけての資料が少なく、今回出土した資料は良好な資料となろう。

本遺跡から出土した10世紀末～11世紀初頭にかけての土器群は、須恵系土器を主体としながらも、伝統的な内面黒色の土師器や高台杯・甕が少量認められる。また、土器の胎土が前代とは明らかに異なる。いわば、食膳具を中心とした古代的な土器様式（王朝国家的土器様式）の終末期、陶器・貿易陶磁器の導入にともない土器の多くが儀器化した中世的な土器様式の過渡期に相当する。

本期以降、煮炊具は西日本が羽釜、東日本ではおそらく鉄鍋に転換し、甕は貯蔵用の須恵器・陶器を除いて消滅する。また、土師器も遅くとも11世紀中～後半には急激に減少し、12世紀前半には消滅する。この11世紀中～後半に前代とは異なる底部が厚く台状を呈する小型杯・皿・杯が出現し、胎土もかわらけ然とした粉っぽい土器へと変化する。この変化は近年研究が進んでいる陸奥北部（岩手県）などでも歩調を一とする（井上1997・2008）。

なお、一之口遺跡東地区や本遺跡で出土した小型杯の大半は、内面に油煙が付着しているものが多く、灯明としての機能が主体である。これに対して、皿や杯は油煙のあるものが少ない。饗宴ないし神饌・供献に用いられた可能性はあろうが、一部は食膳具として用いられたと考えられる。もちろん、挽物容器・漆器の存在も考慮せねばならないが、有機質ゆえに残りにくい。本遺跡でも粗形を含めて数点のみであるが、挽物容器も食膳具の一定量を占めていたことは想像に難くない。

以上、簡単に概期の土器様相と問題点について触れたが、概期の土器は資料的にも数が少ない。また、周辺地域との比較や土器のモデルとコピーについての関係など、多くの視点を明らかにすることができなかった。今後の課題としておきたい。

(管野)

引用・参考文献

- 会津坂下町教育委員会 1990 a 『大江古屋敷遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第16集
- 会津坂下町教育委員会 1990 b 「中西遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第16集
- 会津坂下町教育委員会 1993 「牛沢館」『会津坂下町若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第30集
- 会津坂下町教育委員会 1994 「宮ノ北遺跡（第2次調査）」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第42集
- 会津坂下町教育委員会 2004 『薊王寺遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第56・57集
- 会津坂下町教育委員会 1990 『大江古屋敷遺跡』会津坂下町文化財調査報告書第16集
- 会津坂下町教育委員会 2005 『陣ヶ峯城跡』会津坂下町文化財調査報告書第58集